

花園院宸記 全三十五卷 (2011/05/20現在)

宮内庁書陵部編

刊行の意義と特色

※歴史的古文書を原本そのままの姿で学界などに提供することにより、学問の進歩、並びに原本の保存に寄与する

※本宸記は伏見宮に伝来し、延慶三年花園天皇十四歳の時より、元弘二年、三十六歳の時に至る二十三年間の天皇自筆日記の原本である

※鎌倉時代の代表的歴史資料であり、貴重な文化財でもある

※傑出した能筆家であり、その巧まざる達筆をもって、自在に書記された宸記は他に類を見ない書道史上の優品である

※宮内庁書陵部の研究者による釈文及び書誌の事項を中心とした解説を別冊として各巻に付した

※全三十五巻を原寸でダイレクトに撮影し、原本に忠実な完全複製に努めた

※三色ないし四色のコロタイプ印刷で、原本に近い色調を再現、裏書についても裏打ちを考慮して再現に努めた

※卷子仕立・桐箱及び艶箱入、表紙=重目古代絁（古代紫）、用紙=越前特漉鳥の子三号紙

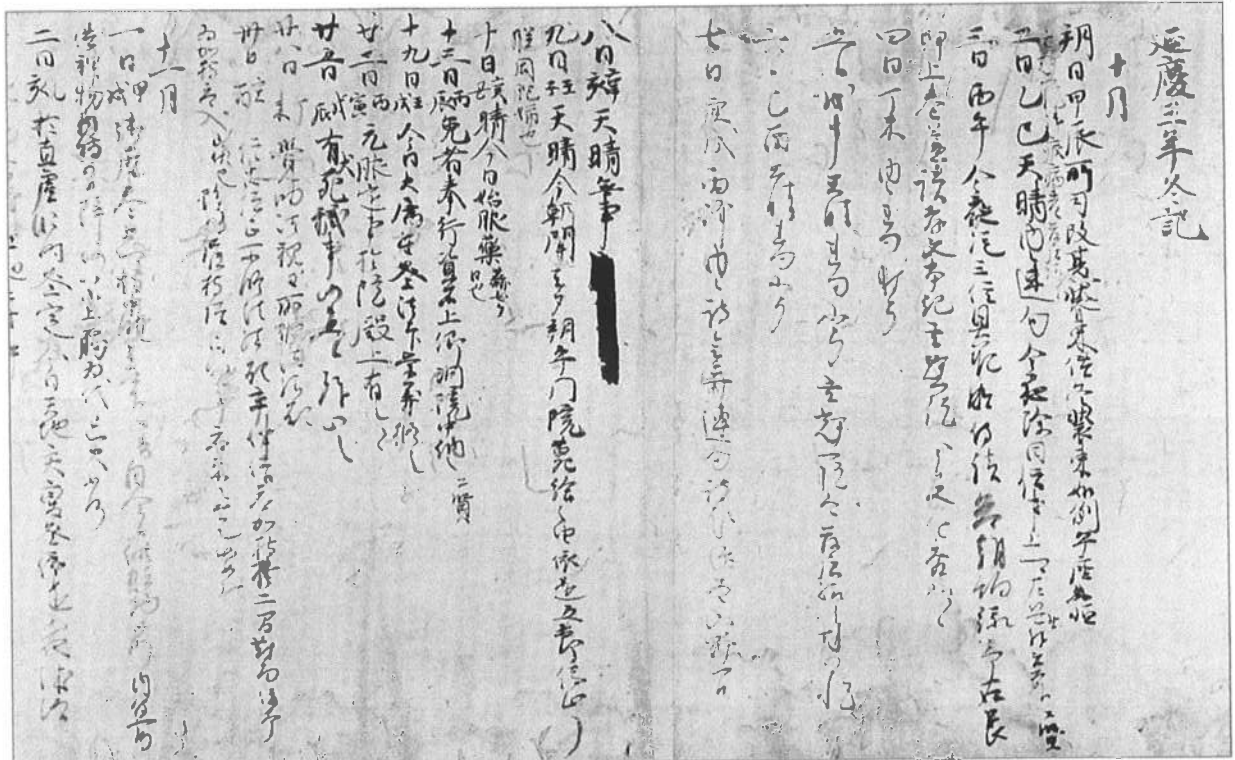
既刊29巻 合計 定価: 本体 7,345,259円 (税5%込)

	本体価格(税5%込)	紙背
第1回配本 全3巻	356,796円	第1巻延慶3年10月～12月 (文保3年2月具注暦) 第2巻延慶4年正月～6月 第3巻延慶4年11月～12月
第2回配本 全2巻	305,825円	第4巻応長2年正月～3月 第5巻応長2年6月・8月～12月
第3回配本 全1巻	356,796円	第6巻正和2年正月～6月 (正和2年具注暦)
第4回配本 全1巻	356,796円	第7巻正和2年7月～12月 (正和2年具注暦)
第5回配本 全1巻	356,796円	第8巻正和3年正月～6月 (正和3年具注暦)
第6回配本 全2巻	315,000円	第9巻正和6年正月～3月 (正和6年具注暦) 第11巻文保2年正月 別記
第7回配本 全1巻	315,000円	第10巻文保元年4月～6月 (正和6年具注暦)
第8回配本 全2巻	388,500円	第12巻元應元年正月～4月 第13巻元應元年5月～6月
第9回配本 全3巻	283,500円	第14巻元應元年7月～8月 第15巻元應元年9月～10月 第16巻元應元年10月～12月
第10回配本 全2巻	399,000円	第17巻元應2年正月～6月 (正應2年具注暦) 第19巻元應2年9月 別記
第11回配本 全1巻	378,000円	第18巻元應2年7月～12月 (正應2年具注暦)
第12回配本 全1巻	393,750円	第20巻元應3年正月～6月 (正應3年具注暦)
第13回配本 全1巻	367,500円	第21巻元亨元年7月～12月
第14回配本 全1巻	399,000円	第22巻元亨2年正月～6月
第15回配本 全1巻	399,000円	第23巻元亨2年7月～12月
第16回配本 全1巻	399,000円	第25巻元亨3年4月～9月 (元亨3年具注暦)
第17回配本 全2巻	399,000円	第24巻元亨3年3月 (紙背「史記抄録」あり) 第26巻元亨3年9月～12月
第18回配本 全1巻	399,000円	第28巻元亨4年4月～12月 (元亨4年具注暦)
第19回配本 全1巻	378,000円	第27巻元亨4年正月～3月
第20回配本 全1巻	399,000円	第29巻正中2年正月～6月 (正中2年具注暦)

※以後平成27年まで毎年1回配本 全24回配本の予定 平均予価390,000円

発行: 思文閣出版

京都市左京区田中関田町2-7 tel075-751-1781/fax075-752-0723
http://www.shibunkaku.co.jp/ e-mail:pub@shibunkaku.co.jp



白眉の文化財

市古貞次(東京大学名誉教授)

『花園院宸記』は、二十余年にわたる御記で、和漢の古典を精読され、文学・芸能にも心をお寄せになり、広く社会情勢、教化に思いを致されるなど、鎌倉末期の史料として第一にあげるべき文献である。院は能筆、かつ画業にも堪能であられたが、御自筆の本宸記は、列聖宸記中、白眉の貴重を文化財である。この度、原色コロタイプ版の良心的な複製が刊行されることになったという。宸記の原本そのままを居をがらにして静観できるのは真に喜びに堪えない。

日記の最高位

林屋辰三郎(京都大学名誉教授)

最近における歴史学研究の発展は、秘庫に収められた日記・文書等の公開によるところが極めて多い。それは潤沢な史料の提供につながると共に、複製による書蹟の観賞に役立ち、文化財研究にも大きな役割を果している。特に宮内庁書陵部による『花園院宸記』の複製公開は、その記主と時代と内容に於いて、日記記録の最高位に位置づけられるもので、そのよこびは多大である。

◎刊行にあたり◎

本宸記は名筆として名高い花園天皇の十四歳から三十六歳迄の日記である。五十二歳の御生涯のうち最も多感な時期の記録といってよく、記文の初めの延慶三年末には、翌年の天皇御元服準備の事が記され、記文の終る元弘二年は、後醍醐天皇隠岐配流や京極為兼薨が記されている。所々散佚しているが、その間の二十三年間を全三十五巻に所収した宸筆の卷子本正本である。

この書を繙けば、帝王学のみならず、当時の最高の知識人の、思想・学問・信仰の実体を知ることが出来る。また和歌でも知られるが、絵画にも堪能で、その軽妙な筆遣いは、光厳天皇大嘗会御禊見物図などにうかがえる。宸筆は重ね書きや訂正が著しく、極めて解読困難である。一方その書には絵画的・音楽的響きさえ感じられ、その理解は活字翻刻ではなし得ず、まさに、コロタイプ出版に相応しい書物といえよう。